

商いの新しいものさし

（株）商い創造研究所
代表取締役

松本 大地

第6回

商いを左右する企業哲学とトップの覚悟

「地元のお店やメーカーをくまなく1軒1軒回りました」と話してくれたのは、あおもり旬味館を開発したJR東日本グループ盛岡ターミナルビルの開発責任者。

昨年12月、東北新幹線全線開業とともに新青森駅1階の東西連絡通路にオープン、19店舗のうちNEW DAYSとヤマトの宅急便サービスカウンター以外はすべて地元MDの選りすぐりであり

る。ナショナルチェーンテナントを導入するのではなく、JR東日本事業創造本部のローカルファーストをポリシーとした地域再発見プロジェクトが生かされていた。

常と観光の重なる楽しさ

の創造がつけられ、地元住民にとつてのハレの場となった。震災の影響で一時途絶えた来店客も、新幹線復旧後は以前のような賑わいが戻った。現時点でも大きく売上予測を上回り、地域活性化に貢献している。

以前、JR東日本グループのカード会社のトップから、「旬味館は社長がどのような思いで施設をつくったかが一目で伝わっている」と言われた



地域の豊かさに出会える駅ビル旬味館

言葉を思い出す。

「ぜひとも恩返ししたい」と飲食テナントの料理長がデベロッパの社長に直訴し実現したのは、東京駅ふれあい隊。東京駅でグラスタなどを運営管理する鉄道会館

おにぎりやカップラーメンなどで過ごしてきた被災者にとって、キーマカレーや沖繩そば、牛タンなどを口にしたとき、きつとおもてなしの心が伝わったであろう。相談を持ちかけた料理長は

では、食をキーワードに地域の活性化策に取り組んでいるが、以前陸前高田市の特産品である生キクラゲの提供を受けた縁があり、食材や厨房機材などを積んだキャラバン隊が各飲食テナントのプロの味を届けた。

東日本大震災後の商業施設の役割は、「社会に、生活者に幸せや喜び、感動を創り出していく使命がある」と実感した。その使命に向けて日々の企業活動を実践することで、大きな成長のエネルギーが生まれ、結果として数字も達成されよう。一番重要なことは経営トップの覚悟ではないだろうか。

「このデベロッパのトップならば、わかってもらえるだろう」と読んでいたに違いない。デベロッパとテナントが一体となった活動は、さらなる信頼と絆が築かれると同時に、商業施設という共同体そのものに社会性が問われていることを示唆する。

商いの新しいものさしの最重要項目は、きちんとした哲学、理念を持ち、覚悟を持って実行できる経営者の存在である。最近、不祥事を起こした焼き肉店経営者や肉を卸した取引先には、いったいどのような企業哲学があったのだろうか。また、課題山積の日本国に対し、どうしていきたくないのか国のリーダーからは具体的な思いが聞こえてこない。と国内外から非難の声が上がる。

本州最北の新駅で地域活性化に取り組んだプロジェクトと一体になって社会的責任を果たしたデベロッパ、そのいづれにも、トップの揺るぎない覚悟のものさしがある。